

解説

石井啓一郎



ここに訳出するのは、アゼルバイジャン共和国を代表する重鎮作家アナール（本名はラスルオグル・ルザイエフ Rasul oglu

Razuv, 一九三八年—）の所謂ユートピア・ディストピア小説『白い羊、黒い羊——ユートピア及び反ユートピア物語 (Ağ qoç, qara qoç - utopik və antiutopik nəşrlər)』（二〇〇三年）の一部である。

本作が書かれた二〇〇三年は、第三代大統領ハイダル・アリエフが死去した年である。アリエフはソヴィエト解体・独立後の外務、内政両面での舵取りに辣腕を振るった人物である。実質敗北状態にあった隣国アルメニアとのカラバグ地方（所謂「ナゴルノ・カラバフ」）をめぐる領有権紛争の停戦協定を締結した（二〇二〇年、アゼルバイジャンはナゴルノ・カラバフへの大規模な軍事作戦を決行し、かつ

てのカラバグ・ハン国の中心で、アゼルバイジャン・ナシヨナリズムの視点からアイコニックな存在であるシユシヤも含め、同地域のかなりをアルメニアの実効支配から奪還している）。また政争に勝利して国内的な政治基盤を安定させ、カスピ海のエネルギー資源開発への外資導入を積極的に促進した。大統領への権力集中、政治の寡頭支配化に功罪相半ばするものはあるが、アリエフの時代はアゼルバイジャンが長らく続いた内憂外患状態から立ち直り、壊滅状態に等しかった経済混乱を脱して将来への希望的な見通しをやっと持てるようになった時期である。

そのような時代の終わりに、アゼルバイジャンの未来への願望と不安、悲観と楽観を映した空想を開陳する本作が書かれたことは象徴的といえよう。そして歴史の転換点を経て書かれた本作は全般に不安神経症的な色彩が滲んでいる。作品はアゼルバイジャンの民話である『マリク・マツマド物語』の主人公同名のジャーナリスト、マリク・マツマドとその家族（妻アイバリ、息子ベイラク、娘ブルラ）が未来のある年に迎えるノヴルズの日——イラン起源の新年行事ノヴルズ（ペルシア語のノウルーズ）——の姿を、異なった祖国の様相のなかに描いている。表題に示されるとおり、ユートピア編・反ユートピア（ディストピア）編という二部構成

の空想物語から成っている。その二部は相互に無関係な物語であると作者が明言している。

民話のマリク・マツマドはある国の王子で、父王の果樹園を荒らした鬼を退治するために二人の兄とともに出陣する。豪壮で向かうところ敵なしの武人マリクは、しかし深い井戸のなかに棲む鬼退治を果たしたとき、嫉妬深い兄たちの裏切りでその井戸の底へ突き落されてしまう。井戸底から異界を彷徨ったのちに靈鳥の助けでマリクはこの世界へ帰還し、邪悪な兄たちに復讐を果たして大団円となる。

その民話を自由にパラフレーズして、「現代（近未来）のマリク・マツマド」はパラレルワールドとして、異なるバクーの「物語」の狭間を往来する。そこにはアゼルバイジャンの共同体史観と、特に一九一八年に民族的世俗共和国として独立を果たしてから今日に至るまでアゼルバイジャンが辿った歴史とを基礎に、将来への願望と不安が交錯した異なる祖国の幻想が展開する。

作品の第一部がいわゆる「ユートピア編」で一章に纏まっており、他方「ディストピア編」としての第二部はさらに三つの物語に分かれている。

ユートピア編はいきなり「デルベンドからハメダーン、ガザフからガズヴィーン」までの広域に生活するアゼルバイジャン人が民族的に団

結し、皆揃ってノヴルズの朝にアゼルバイジャン国歌に恭しく耳を傾ける描写で始まる。つまりイランのテヘラン西部、首都近郊約一五〇キロまで「統合アゼルバイジャン」に包摂されているという、度肝を抜くナシヨナリズム幻想である。

「文化人、知識人のユートピア」として想い描かれるバクーは、南コーカサスとイランの文学、音楽、民俗芸能や造形美術等の文化遺産の豊穡性と多様性を存分に享受する街である。また隣国トルコから中央アジア、北東アジアのテュルク系諸民族の緩やかな統合の盟主的な都市に変わっている。一九一八年以来国に殉じた英雄、英傑たち、そしてナゴルノ・カラバフ紛争やソヴィエト解体時の衝突（所謂「黒い一月事件」等）で落命した名もない数多の犠牲に捧げる記念像や記念碑が遍在する祈りの街でもある。作品はその日のマリクと家族の活躍を描く。マリク自身は職場のテレビ局に本社して新春特別番組を企画放映する。妻のアイパリはタブリーズの歌劇場の新春プレミエ公演に制作されたアゼルバイジャン国民楽派の大作曲家ユゼイル・ハジューベヨフの歌劇『コログル』で舞台美術の仕事に忙しい。息子はアゼルバイジャン領に戻ったナゴルノ・カラバフで鉄道技師として観光開発に携わる。娘はカルクーク（イラク）の大学でアゼルバイジャン語と文学の教員

として勤務し、元日も忙しくテュルク系諸国での講演に駆け回っている。

これに対する第二部『イストピア編』では、またぞろ国内の異なる政治勢力の暴力的な衝突が勃発し、結果としてイランのシリア派聖職者の下のイスラーム主義体制、ソヴィエト復興を狙いバクーにコミューンを宣言したロシア主導（そこにアルメニアの介在が暗示される）の共産党支配体制、そして欧米的な自由を謳歌するように見えても結局は自由と自堕落を履き違えた幼児的で愚劣な「自由主義」体制、という三つに分断されている。「アゼルバイジャンの三分割」というより、バクーの市中心部で特に名所旧跡が集中する旧市街の一角が、三つに分断されているという構成の「バクー小説」で、それぞれの街区が異なるパラレルワールドになっている。

第二部でマリク・マツマドは、まさにトルコ出張に発ったとき、国内の政治的衝突、アルメニア原発の爆発、北西部ミンガチエヴィル貯水池への謎のミサイル着弾による国土の大半の水没というカタストロフの連鎖が突発する。バクーに残した妻子と家族離散状態のままイスタンブルに独り残っていると、忽然と旧知のアルハンが現れる。どこぞの秘密結社に属する「謎の男」となったアルハンの手引きで、マリクは家族を訪ねて分断後のバクーの三つの街区を訪

問する。その街区ごとのエピソードとして第二部を三景に分けている。ここに紹介したのは、その三景のうちで、イラン系シリア派聖職者支配の手に落ちたバクー（実在のバクーでは、イステイグラリアト通りと旧市街城壁の間の区域をフィラルモニア音楽堂まで到的地域）を舞台に、分断前は画家であったが、今はクルアーンを筆写するイスラーム書道教師になった妻との悲しい再会のエピソードである。

妻が留まる街区はペルシア語で「バクーの楽園」を意味するベヘシュテ・バードクーベが訛った「ベヒシュティ・バードイクーバ」である。ちなみに息子は、ロシア人共産主義指導者が支配する「バクー・コミューン」の書記局事務所（実在のバクーでの舞台はニザミー文学博物館）で、通信の盗聴監視を担当する技師として仕えている。似非の自由主義社会「バクー・シティー」に暮らす娘は、ベリダンサーのスターの座に躍り出て、ゲイの人気ミュージシャンであるパートナーの支援で今やバクー・シティー市長選挙に立候補する勢いである（実在のバクーでの舞台はシルヴァンシャー宮殿と旧市街から、カスピ海岸沿いの地帯）。

こうした分断と外国勢力支配がアゼルバイジャンにもたらした末期的で惨めな社会状況を表す文学的手段として、作者は支配者の言語（あるいは外国の影響力を象徴的に示唆する言語）、

つまり上記の順番に沿えばペルシア語、ロシア語、英語の各語と母語アゼルバイジャン語との間に醜悪な混交が生じた、いわば言語崩壊の状況を作法的に作り出している。デイストピア編の登場人物たちは、皆ネイティヴのアゼルバイジャン人ではあるが、支配者の言語に同化・熟達することもできず、しかも母語も劣化している。作者はこの各語の語彙を、現代アゼルバイジャン共和国の正字法であるラテンアルファベットに転写して組み込み、アゼルバイジャン語を破壊的にデフォルメしている。

この手法は一次的にアゼルバイジャン語自体への破壊であるが、同時に転写された外国語にも次のような加工をして、支配者の言葉も母語も、いずれの運用も崩壊した状態のアゼルバイジャン人像を作り出している。

- ・ 原語における口語の混在 (例 ペルシア語 nojahed → noshevid)
 - ・ 作法的にステロタイプ化したトルコ語話者の訛 (例 ペルシア語 bargozide における母音の前舌音化 → bargoziyd)
 - ・ 意図的な原語の文法・語法ミス (例 ロシア語の Бакинская に対する Бакинский の誤用)
- 研究資料としてこれを具体的に俯瞰するならば、何らかの方法で紙面に作者の独自表記と各語原音を対比して再現するのも意味がある。しかし紙面を徒に煩雑化することを避け、作中

のアゼルバイジャン語・ペルシア語の断裂感を読み物として活かすことを意図して、本稿はこれをカタカナ表記で訳文中に嵌めこみ、そのペルシア語から日本語への訳語・訳文を脚注に示すことで構成した。

現代のアゼルバイジャン共和国では、特に十九世紀のゴレスターン条約、トルコマンチャーイ条約以後、祖国とはイラン、ロシア(帝政時代・ソヴィエト時代)などの地域大国や他民族の不当な力に翻弄されながら多大の犠牲で贖った尊厳存在である。例えばバフティヤル・ヴァハブザーダの長詩『キュリユスタン』(一九五九年)に明確なように、アゼルバイジャン共和国側の共同体史観に拠れば、古都タブリーズに代表されるアラス河以南の「南アゼルバイジャン」は、いまだにイランの不当な占領下に置かれた未回復で残る祖国である。本作は漸く独立を取り戻した祖国について、民族の苦難の歴史の向こうに望む理想と、その歴史が「祖国の今」に回帰すれば生起するであろう災厄とを物語化して活写する。それはソヴィエト時代から独立後までの時間を実体験で知る作者の祖国への訓告でもあり、また切実な不安と懼れの想いでもある。

なお訳稿で、脚注の範囲を超えて説明が必要となる点を若干補足しておきたい。

まずベヒシュティ・バーディクーパーで全集が

刊行されると話題になる「アフマド・キャスラヴィー」である。アフマド・キャスラヴィー(ペルシア語 Ahmad Kasravi, 一八九〇—一九四六年、アゼルバイジャン語表記 Ahmad Kasavi)はイランの思想家、歴史家。アゼルバイジャンの出自(タブリーズ生まれ)であるが、その著書『アーザリー』においてアゼルバイジャンの古語はトルコ語と無関係なイラン系諸語に淵源があるとして、トルコ系言語を母語とする国民も、(ペルシア語にもとづく)イランの国民的一体性と不可分な繋がりを持つとの持論を展開したと考えられる。そのためアゼルバイジャン共和国ではキャスラヴィーを、特にアゼルバイジャン人に対するペルシア至上主義的な「イランにおけるショーヴィニズムの体現者」と認識する傾向が強い。本作はバクーを支配するペルシア至上主義的なシール派イスラーム主義者が推奨礼賛する思想家として、象徴的にキャスラヴィーの名を登場させている。ただし思想家としてのキャスラヴィーは膨大な著書を残しており、その思想体系は「社会的言語的分裂」も包含しながら、イラン社会の病根をきわめて多岐にわたって捉え、歯に衣着せぬ批判を展開する複雑・難解なものである。特にシール派主義や指導者への批判を含め、従来のイスラームの在り方への痛烈で辛辣な批判を含んだ彼の宗教に関する著作・論考は「反イスラーム的」である

とされ、現在のイラン・イスラーム共和国体制下で発行を許可されていないという事実には本作を読むうえで十分な注意を要する。

また作者がベヘバハーニーを滑稽な存在として描くうえで言わしめた「ノヴルズとは聖アリが玉座に上った日」という頓珍漢な科白について、念のために付記しておく。ここで言う聖アリとは、スンナ派イスラーム史のなかの第四代正統カリフ（在位五六六～六一年）のアリー・ビン・アビー・タリーブ（アラビア語、*Abī Tālib*、以下「アリ」）である。シーア派では、イスラーム共同体を導く指導者としての預言者の権威は、娘婿アリとその血統に引き継がれるべきとされている。またアリはしばしば神秘主義的、秘教的な文脈で神アッラーの具現とみなされて崇拜の対象にされることもある。アゼルバイジャンはサファヴィー朝がシーア派イスラームを国教に定めて以後、イランと同じシーア派イスラームの国である。

続いて「ブゾヴナにある聖アリさまの御足の跡」と言及されるブゾヴナは、バクーの北東約三〇キロ、アブシェロン半島のカスピ海岸に近い地名である。ここでは十二世紀以来アリの足跡が残ると信じられる岩が崇拜され、ここは現在モスクを併設した参詣地になっている。

なおこの翻訳にあたっては、大阪大学大学院言語文化研究科のベヘナム・ジャヘドザデ先生

に多くの貴重なご教示をいただいた。ここに深く御礼を申し上げる次第である。まことにありがとうございました。